

## 信念の外交官 杉原千畝

槇 良生

### ・ 日本海の港町 敦賀

敦賀市は福井県嶺南地方の人口 6 万ほどの中核都市である。県都福井市との間には難所の木の芽峠があり、若狭や近江との関係が深い。琵琶湖の北端までは市街地からは 20km ほどで、関ヶ原を抜ければ伊勢湾に達することもできる。古来より交通の要衝で、日本海側で陸蒸気が最初に走ったのがここだった。明治 15 年(1882 年)3 月 10 日、長浜—金ヶ崎間が開通した。これは新橋—横浜、神戸—大津、手宮—札幌、釜石—釜山に続くもので、敦賀駅の開業も名古屋駅や福井駅よりも早かったのである。旧敦賀港駅は金ヶ崎駅として開業し、後に鉄道棧橋を新築移転して敦賀港駅と改称した。明治 32 年(1899 年)7 月に開港し、同 35 年敦賀—ウラジオストク間に定期航路が開設されると、同 45 年 6 月から新橋—金ヶ崎間に 1・2 等寝台車を連結した欧亜国際連絡列車が運行され、シベリア鉄道を介してパリやベルリンと半月余りで結ばれることになった。その後、昭和 32 年(1957 年)10 月、田村—敦賀間に、最初の本格的交流電化が完成した。その 5 年後には当時日本一、世界でも 5 番目に入る北陸トンネルが開通したのである。令和 2 年には、敦賀、長浜などにまたがる鉄道の物語が日本遺産に認定された。敦賀市のシンボルロード(中心商店街)には 1999 年開港 100 年を記念して、「港」と「鉄道」の街として、先ごろ亡くなった漫画家松本零士さんの「宇宙戦艦ヤマト」と「銀河鉄道 999」のモニュメントを気比神宮までの間に 30 基設置して、観光客を迎えている。令和 6 年 3 月 16 日、北陸新幹線の金沢—敦賀間が開業され東京といよいよ直結されることになる。観光客がこれを機に増えてゆくことを期待したい。港町敦賀は若狭湾の自然の恵みには事欠かない。冬の越前ガニは言うまでもなく、北前船の伝統を受け継ぐおぼろ昆布、かまぼこ、焼きサバ、へしこなど、名物は満載である。さらに福井県で「カツ丼」といえば、卵とじではなくソースカツ丼をさす。その元祖が福井市片町の「ヨーロッパ軒総本店」、そして県内のれん分け第一号が「敦賀ヨーロッパ軒本店」である。早稲田鶴巻町でヨーロッパ軒が創業された後、横須賀に移転したが関東大震災で倒壊。24 年に郷里の福井に戻り、ヨーロッパ軒(現総本店)を開いた。敦賀ヨーロッパ軒は 39 年 12 月、創業者の高島増太郎氏の下で修業を積んだ赤坂耕二氏が創業(当初は敦賀分店)。伝統を受け継ぐレシピは今も全く変わっていないと言う(両丹日日新聞 2014 年 9 月 1 日の記事より)。

### ・ 杉原千畝の生い立ち

1940 年代に「命のビザ」を携えたユダヤ難民が上陸したのも敦賀の港だった。第二次世界大戦中にリトアニアのカウナスに赴任していた杉原千畝は、ナチスドイツの迫害を逃れてきた人たちに 1940 年 7 月から 8 月にかけて、本省の訓令を無視してまで

大量に発行したのだった。彼は1900年(明治33年)1月1日、岐阜県武儀郡上有知町(現在の美濃市)に誕生した。税務官吏の父・好水は転勤が多く、千畝も各地を転々とした。父は彼に医者になることを勧めたが、これに反して早稲田大学高等師範部英語科の予科に入学、英語の教師になりたかったという。父からの仕送りもなく窮していたある日のこと、地方紙に官報の掲示(外務省留学試験)を知った。彼は大学の図書館に籠って猛勉強して、ついにこれに合格したのだった。1919年(大正8年)、早稲田大学を中退して、外務省の官費留学生として中華民国のハルピンに派遣されて、ハルピン学院の聴講生としてロシア語を学ぶことになる。彼のロシア語はずば抜けていた、との証言があるほどで、母校のハルピン学院でロシア語講師を務めることになったのである。

1932年(昭和7年)、満州国が建国されると、千畝は満州国政府の外交部に出向する。この時、書記官としてソ連との北満州鉄道(東清鉄道)の譲渡交渉を有利に進めて、高い評価を得た。これより前、1924年(大正13年)、白系ロシア人クラウディア・アポロノワと結婚したが、1935年に協議離婚している。千畝はロシア通を買われて、関東軍の橋本欣五郎からスパイになるよう要求されたがこれを拒否、1935年(昭和10年)には満州国外交部を退官した。満州国の軍部の横暴に耐えかねたようである。クラウディアとの離婚もこれに関係したものであったかもしれない。帰国後、彼は知人の妹の菊池幸子と結婚し、日本の外務省に復帰したのであった。

#### ・命のビザ

外務省に戻った千畝はこの後、モスクワの日本大使館に赴任する予定だった。満州国時代の白系ロシア人グループとの繋がりのために、ソ連当局は千畝を「ペルソナ・ノン・グラータ」として、ビザの発給を拒んだのである。当局が警戒するほど、彼の活動歴と人脈があったのであろう。1937年(昭和12年)、彼はフィンランドのヘルシンキ日本公使館に赴任した。ノモンハン事件で手痛い敗北を味わった日本政府は対ソ諜報活動を重視したためとされる。さらに、1939年(昭和14年)、リトアニアのカウナス日本領事館領事代理に転じて、8月28日に着任した。直後の9月1日、ドイツはポーランド西部に侵攻して、第二次世界大戦が勃発、9月17日にはソ連軍がポーランド東部へと進撃する。翌1940年6月15日には、ソ連軍はリトアニアにも進駐を開始している。同国の首都リガには日本大使館があったが、カウナス領事館は外務省の直接の指示命令系統にあり、大使館とは関係なかった。独ソ間の軍事情報の収集が任務だったのである。この間、ドイツ占領下のポーランドからリトアニアに亡命してきたユダヤ人たちは、各国の大使館・領事館からビザを得ようとしていた。リトアニアはすでにソ連の占領下にあり、大使館の閉鎖を求めており、まだ業務を続けていた日本領事館に彼らが殺到したのはこうした事情があった。本省からは受給条件を満たす者に限定するよう再三勧告をうけていたが、罷免を覚悟で1940年8月31日、領

事館を閉鎖して離任の列車がカウナスを発車するまでビザを書き続けたのである。「命のビザ」で救われたユダヤ人が何人だったか正確にはわからないが、その数は4,500人とも6,000人とも言われる。千畝のビザを手にした彼らはシベリア鉄道で極東のウラジオストクに向かい、船で日本の敦賀港に上陸した。千畝のビザはトランジット・ビザだったので、さらに横浜や神戸から最終目的地へと旅立ったのである。これを根井三郎・小辻節三らが支援し、ジャパン・ツーリスト・ビューロー(後のJTB)も難民の輸送に奔走したのだった。

・当然のことはただけです

千畝はリトアニアを出ると、チェコのプラハに赴任した。ここでもビザを書き続けていたと言う。さらに東プロイセンのケーニヒスベルクに移る。ここで、独ソ開戦の秘密情報をポーランド諜報機関から入手して、1941年5月9日日本国に打電している。ドイツ側も千畝の諜報活動を警戒したため、彼はここを離れ最後の赴任地となるルーマニアのブカレストへ向かった。ここで、終戦を迎えた彼はソ連軍に拘束され、1947年4月ようやく博多港に上陸できたのである。帰国した千畝のもとに、1947年6月外務省から退職通告書を送付されてきたという。その後は、ロシア語が堪能だったので、貿易会社などを転々とした。住居は藤沢市鵜沼で暮らした後、晩年は西鎌倉に転居している。1960年(昭和35年)に川上貿易のモスクワ駐在員となり、その後蝶理の国際交易モスクワ事務所長などを務めたのである。1978年(昭和53年)に退職してようやく帰国した。その間、杉原ビザの受給者であるユダヤ人たちは千畝を探していたが、1968年(昭和43年)から翌1969年(昭和44年)にかけて、ついに見つけ出すことに成功して、感動の再会を果たすことになる。1986年(昭和61年)、千畝は鎌倉市内の病院で死去した(満86歳)。彼はその人道的行動について聞かれても「大したことをしたわけではない。当然のことはただけです。」と答えたという。彼の名誉が正式に回復したのは、河野洋平外務大臣による演説で、彼の死から14年後の2000年10月10日のことだった。

#### 【参考文献】

「杉原千畝」(白石仁章著、新潮文庫)

「杉原千畝の実像」(古江孝治著、ミルトス)

「六千人の命のビザ」(杉原幸子著、朝日ソノラマ)

「命のビザ 遥かなる旅路」(北出明著、交通新聞社新書)

「諜報の神様」と呼ばれた男(岡部伸著、PHP文庫)

「陸軍将校の教育社会史 上・下」(広田照幸著、ちくま学芸文庫)

ウィキペディア、杉原千畝記念館、人道の港・敦賀ムゼウム、敦賀鉄道博物館、両丹日日新聞の記事、敦賀ヨーロッパ軒のHP等の各種資料を参考にした



資料 1：杉原千畝



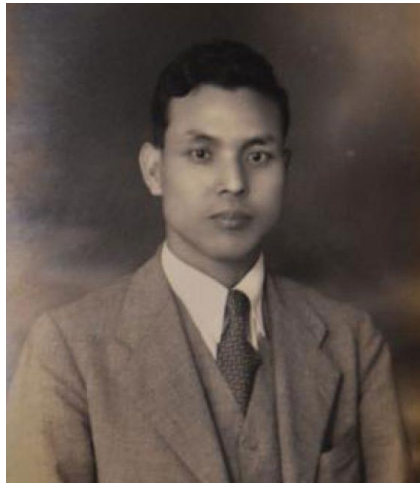
資料 2：外務省試験頃



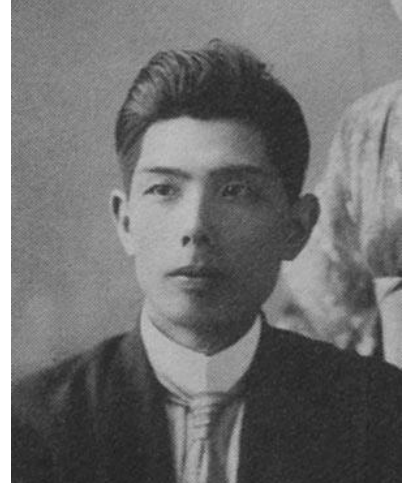
資料 3：杉原夫妻



資料 4：最初の妻 クラウディア



資料 5：根井三郎



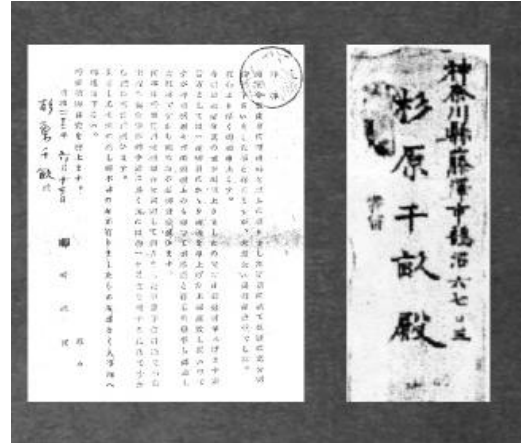
資料 6：小辻節三



資料 7：松岡洋右（外相）



資料 8：オスカー・シンドラー



資料 9：外務省からの退職通知





資料 10：カウナス日本領事館



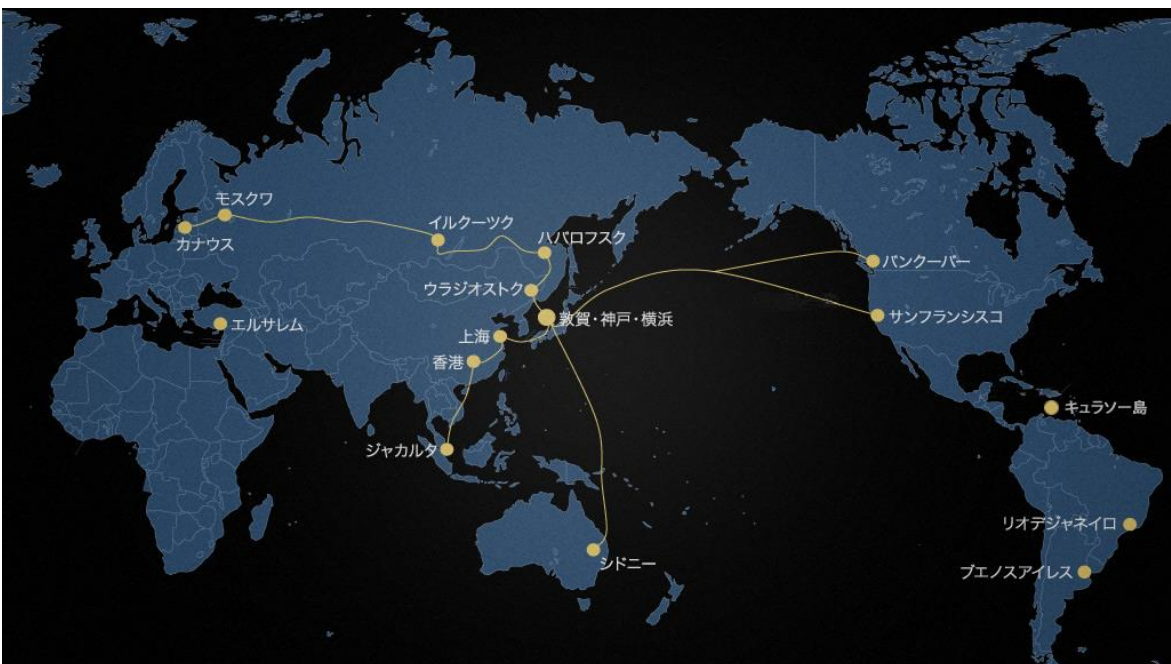
資料 11：ビザ発給を求めるユダヤ人たち



資料 12：人道の港 敦賀



資料 13：杉原ビザ



資料 14：ユダヤ人の脱出ルート（杉原千蔵記念館 HP から）

杉原千畝の経歴				
西暦	元号	年齢	出来事	参考
1900	明治33	0	杉原千畝誕生	義和団事件
1905	明治38	5	岐阜県中津町に転居	ポーツマス条約
1910	明治43	10		日韓併合
1912	明治45	12	愛知県立第五中学に入学	第1次護憲運動起こる、清朝滅亡
1915	大正4	15		対華二十一ヶ条の要求
1917	大正6	17	五中卒業、単身上京	ロシア革命
1918	大正7	18	早稲田大学高等師範部英語科入学	米騒動、パリ講和会議
1919	大正8	19	外務省留学生試験に合格	
1920	大正9	20	歩兵第79連隊に入隊	
1922	大正11	22	満期除隊、復学	
1924	大正13	24	外務書記生に任命、クラウディアと結婚	
1929	昭和4	29	日露協会学校講師を命ぜらる	世界恐慌
1931	昭和6	31		満州事変
1932	昭和7	32	満州国外交部へ移籍	
1935	昭和10	35	外務省へ復帰、クラウディアと協議離婚	
1936	昭和11	36	菊池幸子と結婚	日独防共協定締結
1937	昭和12	37	フィンランド・ヘルシンキへ赴任	日中戦争勃発
1939	昭和14	39	リトアニア・カウナスへ赴任	第二次世界大戦勃発
1940	昭和15	40	多数のビザを発給、プラハへ転勤	ソ連、バルト三国を併合
1941	昭和16	41	ケーニヒスベルク→ブカレストへ	太平洋戦争はじまる
1945	昭和20	45	ブカレスト郊外の収容所へ	戦争終結
1947	昭和22	47	帰国、外務省を退職	
1957	昭和32	57	ニコライ学院でロシア語講師として勤務	
1960	昭和35	60	川上貿易に入社、モスクワへ赴任	
1978	昭和53	78	モスクワから帰国	
1986	昭和61	86	鎌倉市で死去	